昭和100年・戦後80年特集
～郷土のあゆみをたどる①～

節目年となる令和7(2025)年、県映像センターが所蔵している貴重フィルムやビデオテープをDVDにしました。地域の活動や家庭で「昭和～平成時代」の富山の雰囲気を味わってみませんか。

1 貴重映像の保存「GHQ提供16㎜フィルム」シリーズ

1948（昭和23)年、ＧＨＱが占領政策の一環であるＣＩＥ(民間情報教育)映画計画に基づき、日本人の民主化教育と荒廃した日本人の娯楽のため、米国製16mm発声映写機約1300台とフィルム映画が日本に持ち込まれた。映画の貸与そのものは47年から始まっていたようであるが、その後、文部省(当時)が人口等に応じて各府県に配分・貸与した。フィルムには日本語のナレーションや字幕が付けられたものや、日本で製作されたものもあり、最終的には406本に及んだという。

同計画は講和条約の発効と同時に廃止されたが、日米間の交流を図るためのＵＳＩＳ（アメリカ情報サービス）計画として継続された。本センターにはＣＩＥとＵＳＩＳのものがあり、ケースには所有主として「連合国軍最高司令部民間情報教育局教育映画配給部」「米国大使館映画課」と記載がある。

富山県内では49年に県フィルムライブラリー（本センターの前身）が設立され、映写機17台、フィルム60本などが貸与された。フィルムは２年後には382本まで増えたが、毎日のように移動上映されたため摩耗が激しく、処分されるなどして、徐々にその存在も忘れられた。

1995(平成７)年時点で、本センター内にフィルム34本が残っていることが判明し、当時、新聞紙上で大きく報道された。しかしその後、フィルムの劣化が進み、現在22本まで減少した。この映像を保存するため、2005～07年にかけてセンターで18本をデジタル化し、館内で大切に保管してきた。この映像は当時の時代状況、ＧＨＱが日本に何を伝え、何を根付かせようとしていたのかを考える上で、貴重な歴史的な資料である。

富山県教育文化会館3階、富山県映像センターで貸し出しています。県民の皆様は無料でご利用できます。